

美しきを結ぶ

銀月

見上げた蒼に

優しい朝が広がる

消えることはない

笑顔を交わした

永遠の日々

美しい輪舞曲(ロンド)のように

柔らかい

純白の羽のように

暖かく眩しい

天色(あまいろ)に結ぶ

だから笑うよ

ずっと一緒に

だから見てるよ

この胸に

今日も

明日も

「行つてきますー！」

その小さな天使は、見送る祖母に大きな声でそう言って、その身の丈と同じくらいの羽を大きく広げて飛び立った。

白い雲の海を抜けたその先の眼下には、記憶に残る街の風景。そしてその胸には、ずっと逢いたかった人達への熱い想いとほんの少しの緊張感。今日この日が、天使として臨む初めての勤め。

大天使ジョフィエルの眷属 天使名 ミユ

それが、この小さな新米天使に与えられた名前だった。



時々、娘が語り掛けてるように感じる。そう思える時がある。

それは、心の中で聴こえる幼い純粹な声。

新型コロナウイルスがこの世界を蹂躪し始めて、もう三年の月日が過ぎた。

それと同時にソーシャルディスタンスという言葉も広がり、人々の間にはその物理的な距離と同時に見えない心の距離も生まれたように思えた。

離れ離れになる事の恐ろしさ、苦しさ、それを知る者にとっては傷口に塩を塗る様な現実。失う怖さを知らない人達よりも、より強い辛さに耐えなければならない現実があるという事を味わった人達も少なからずいるだろう。

失う度に強くなる。そんな超人的な力があればどれだけいいか……

娘を守る強さが欲しかった。

あの最後の一筋の涙。

私はいつか娘と再開し、その笑顔を見るまで忘れる事は決してないだろう。

娘が遺し、繋いでくれた大切な想いと一緒に。

休日、近所のゴミ拾いを始めた。心の中であの声が聴こえたのだ。きっと何かをしたいという気持ちの表れだったのだろうけど、しかし、実際に何をしたいか定まらなかった。まずは単純に自分の家の周りのゴミを拾おうと行動したに過ぎなかった。でも、定期的にやり始めると以外とやりがいもあり、そのうち子供達にもそれが伝播したのか、時には長男とその友達と一緒に近所をまわる事もある。ゴミを拾って綺麗になつていくと子供達が喜んでゴミ拾いをしだした。

そんな時にはいつも子供に教わる気持ちになる。

そして、空を見上げてこころで呟く。

(「この時間と喜びを、美結が教えてくれたんだね」)



新米天使のミュは、記憶にある街を眺めてまわった。そして、悲しそうに俯く一人の男の人に語り掛けた。

「どうしたの。パパ？」

その人は、ふと何かに気付く素振りを見せはしたが、また暫くすると俯いてしまった。

ミュも思わず悲しい気持ちになり目を伏せる。でも、すぐに顔を上げて前を見る。

「ダメダメ！そうよわたしはもう天使だもん！大好きなみんなを元気にしてあげなくちゃ！私はうつむいてなんかいられないもん！」

そう言うとミュは小さな魔法を使う。それは、人の記憶を少しだけ呼び覚ます魔法。

キーワードは回覧板。

「そういえば、なんか回覧板に挟んであったな・・・」

すると、さっきまで俯いていたその男の人は、不思議と思いついた様にそう言うと、大分使いこまれた年季の入った古い回覧板を手に取り、そこにあったとあるチラシを

見つけて眺める。

「ああ、これだ、平和美術展……作品募集か……ちょっと行ってみるかな……」

そうして彼は、町の公民館で行われていたその美術展に子供達の絵と、数年前に祖母から受け継いでいた彼の祖母の家族で編んだとある文集を持って足を延ばした。

「え、展示料金が掛かるんですか？」

「はっ」

私は少し意外に思った。平和美術展というので気軽に作品を置いてくれるものと思っていたからだ。しかし、考えてみれば展示会を開くのも確かにタダでは出来ないのかも知れない……。

「因みにどのような作品をお持ち頂いたのでしょう？」

そう言ってお下されたこの方は、どうやらこの平和美術展の主催者の方だったようだ。

「あ、はい、えっと、こちらが子供達の作品でして、数年前に天に昇った娘の作品とこの子達の作品を……」

と、言いながら私は、一緒に来ていた次男の風雅と三男の桃舞の紹介をした。

そして、その後に……

「それで、こちらが先日、祖母の遺品として預かっていたモノなのですが……」

と、言いながら私は生前、祖母の福島良子から『ばあちゃんの宝物』として託された袋にあった

『おおでまり きょうだい家族文集』を見せた。

「ほう？文集ですか？ふくむ、なるほど御家族では、珍しいですね」

「はい、それと戦前・戦中・戦後の事が書かれていますので、こちらの平和美術展の方で展示頂ければどうかと思っております」

私は少し熱が入っていたかも知れない。しかし、この美術展にこの文集を持って来ようと思ったのは、やはりこの文集から感じた平和への想いをたくさんの方の目に触れさせたいという思いだった。

そして、それが無意識に働いていたのかとも今となっては思うのだ。

「そうですね、わかりました。ただ、娘さんとお婆さまは亡くなられているのですよね？」  
そう訊く主催者の方の言葉に私は少し胸がざわついた。

「え、ええ……」

「実は、初めての試みなのですよ、亡くなられた方の作品を展示するのは」

「え……あ、ああ……そ、そうなんですか？」

少しだけ、不安の風が心に吹く。

「だとしたら、亡くなられた方から展示料金は受け取る訳にはいかないなあ」

「え？」

「是非とも展示させてください。お金は頂きませんので」

「は、はいーよ、宜しくお願いしますーありがとうございますー！」

そうして主催者の方の粹な計らいで、娘・美結の絵と息子達の絵、そして祖母が遺してくれた十二冊の文集『おおでまり』の展示をさせて頂ける事となった。

「ふふふ♪パパもみんなもよろこんでるーよかったよかった！ほらねーわたしの魔法はスゴイでしょ？ふふふ♪」

決して人には見えてはいないが、天使のミュはそういういながら得意気な表情と仕草で、自分の作品や弟たちの作品、そして祖母の文集『おおでまり』が展示されている風景を笑顔で眺めていた。

「わあー！キヨちゃんの絵スゴイ上手ー♪とってもキレイだなあー♪ふーちゃんの絵も楽しそうー！運動会かー私も近くで見たかったなあーあの時はまだ天使の見習いだったから、わたしもお空でお勉強してたのよねーだから運動会が近くで見れなくて少し残念だったけどこうしてふーちゃんの絵で見れたからうれしいな♪」

ミュは弟・風雅君の運動会の時は空の上の神様のところで天使になる為の勉強をしていて遠くからしか運動会を見られなかったのだ。

「でも、わたしもがんばって天使になれたから、こうしてみんなの近くに來れるようになったのよ♪みんなのがんばってる姿もちゃんとみてるからね!」

そうして純白の柔らかかそうな翼を広げて優しい笑顔を浮かべながらミュはみんなを見守っていた。



私の住む町では、秋に祭りが開かれる。市街地通りで開催されるその祭りは、市街を歩行者天国にして行うモノで、中でも各町内の山車は、江戸末期に作られているモノもある歴史のある祭りである。二日間に渡って行われるこの祭りは、二日目に獅子舞や甲冑づくり体験、また大風の展示など様々なイベントもあり、伝統と祭りの情緒を味わえる。

そして私は、その秋祭りに娘の美結が昔にお世話になっていた養護施設の中で、比較的外出が可能な子供達とその秋祭りに参加する事になった。

ボランティアで施設の近隣の主婦の方達も一緒に参加してくれる事になったが、私はあくまで美結の友人を招待するというつもりで参加した。天に昇った美結もきつと喜んでくれるだろうと思って…。

「お天気にも恵まれてよかったですよね」

「ええ、子供達も喜んでくれていい思い出になると良いですよね♪」

そんな会話もしたのだろうか、ボランティアで参加してくれた近所の優しいおばちゃん達も本当に良い人達で私は安心していた。招待した子供達も喜んでくれていて、普段なかなか外出も自由に出来ないこともあり、はしゃいでいたところも少なからずあったようだ。

施設の職員の方に後から聞いた話しでは、秋祭りに参加したその日、子供達は昼間の興奮が冷め止まず、夜になってもいつもの時間になかなか寝付けなかったという事だった。

少し興奮させ過ぎてしまったかもしれないと思いましたが、それも含めていい思い出  
になつてくれた事を期待したい。

ただ、私は少し懸念した事があつた。

秋祭りに参加している際に感じた一部の心無い冷たい視線だ。障害を持つ人達、とり  
わけ今回秋祭りに参加していたのは子供達だ。それでも、中には白い目で見て来る人  
達も少なからずいた。無論、中には悪意ではなく哀れみの視線もあつたのかも知れない  
し、私の思い違いもあつたのかも知れない。

でも、そういった事も全て含めて、まだまだ障害のある人たちに対する理解が広がっ  
ていない事の現実にも憤りも遺憾の念も感じてしまふ。

私は運が良かっただけ。

健康に五体満足に生まれ育つたのは、運が良かっただけだと思う。だから、それを  
あたりまえとは思いたくないし、思つてはいけないと思う。あたりまえと思つたその分  
だけ、人の心に寄り添うなんてことは出来ないから。

その白い目を、その冷たい感情を、その哀れみの見方を、どうか恥じて欲しい。  
そして、命そのものに真の意味で優しくあつて欲しい。

自分の中の本当の温もりに出逢つて欲しい。



「ありがとう。パパ……ミユのお友達も、みんな楽しそうだったね！」  
そう言つてミユは秋祭りの様子を見守っていた。

「ボランティア？つていうの？やさしいおばちゃんたちもみんなありがとう！ミユのママ  
と同じくらいみんなあつたかいんだね♪」

しかし、ミユは少しだけ悲しそうな表情になる。

天使であるミュにしか見えない灰色の霧が見えたからだ。

冷たい、冷たい。霧。

それは、本当の優しさを知らない人達から立ち昇る霧。

ミュは天使になる前に、神様と大天使様から教わった大事な事があった。

『いいかいミュ。キミが天使になる為にこの事を決して忘れてはいけないよ。』

『人間の世界は、とても残酷な霧が立ち込めている。冷たくて、凍えてしまいそうな霧が至るところに立ち込めている。でもね、その霧は人々の優しい心で少しずつ消えていくんだ。だからミュ。あなたは人の優しさを信じてたくさんその優しさを広げてあげてくださいよ。あなたにはその力があるのですから。人々の心に優しい気持ちを目覚めさせる暖かい力があるのですから。そして、いつの日か灰色の霧が消えた澄み切った素敵な世界になりますようにと祈りながら、がんばるのですよ……』

そして、ミュはうなずいて神様と大天使様に笑顔で言った。

「はい、がんばります！天使ミュはこの世界のやさしい人たちの心を信じてるから」



桜の意思なのか、それとも娘の……美結の意思なのか。

桜の中で見慣れた服で、今まで見た事のない笑顔で、私を見てくれたね。

でも、私は目を開けてしまった。

夢に……してしまった。

ふと気付くと、時計の針が忘れられない時を刻んでいた。

でも——

夢とはいえ、笑っていてくれた娘に嬉しい涙を見せた。

夢とはいえ、美結のあたたかさを感じて嬉しい涙を流せた。

だから美結は、私の心の闇をやさしく照らしてくれたんだね。



春が来ることを待ち遠しくなる様に、晴れた空を見上げて隣に美結を感じるように、その幸せをずっとずっと大切にしてい進めるように……

ありがとう美結。

君の父親である事を、私は誇りに思う。

桜にその思いを委ねるから、美結に届く様に……  
届きますように……



「わたしは春が好き♪」

「へえ、そうかい……おばあちゃんも好きだよ♪」

「そうなの？ ミユと一緒にだね！」

今日は天使のお仕事もお休みの日。ミユは大好きな良子おばあちゃんと空の上から綺麗な桜色の街を眺めていた。

「ひさしは桜が大好きだったよ」

「パパも！ ホントに！ ミユも大好き！」

ミユは良子おばあちゃんの言葉に驚くと同時にとても嬉しくなった。

「ああ、本当だよ」

「そっかあ〜ふふふ♪うれしいな♪」

「ミユは知ってるかい？」

「なにを？」

「桜には“花明かり”って言葉があるんだよ」

「花明かり？」

「ああ、桜の花が満開で、闇の中でもあたりがほの明るい事をそう言うんだ」

「へえ〜すてき〜♪」

「ミュは桜が好きなんだろう？」

「うん大好き！」

「それなら桜と同じように、闇をやさしく照らせる天使になるんだよ」

「うん！」

その時の良子おばあちゃんの笑顔はとても柔らかくやさしかった。

そして、ミュは思い出していた。あの夢の中の桜の中の父の笑顔と……その涙を……

「パパ、ママ、きーちゃん、ふーちゃん、とーまちゃん、わたしはいつもいつもみんなのそばにいるからね！みんなの笑顔をわたしはずっと近くで見てるからね！みんな大好きだよー！」

そう叫ぶミュの瞳からは、きれいなきれいな涙が溢れていた。

そして、美しく輝くその涙の光は、空の青を映しながら再び魔法を放つ。それは、永劫消える事の無いたくさんの笑顔を美しく結ぶ魔法の力。



世の中には、どんなに幸せや平和を望んでも、理不尽にそれらを踏み躪る出来事が沢山ある。その度に人々は混乱し、その現実を憎み、攻撃する対象を見付けては、自分達の留飲を下げる為に徹底的にあらゆる手で、方法で、痛めつける。

しかし、それでもこの力には敵わない。

自然の力――。

五百万年前に人類がこの地球に生まれてから一体何度、自然の脅威に晒されて来ただろう。地震・嵐・最近では異常気象なども、もちろん含まれる事だろう……

そして、忘れてはいけない感染症——。

新型コロナウイルスによる感染症は、世界中の人々の生活を大きく変えてしまった。人々の中のその距離が、意図せず広がっていく現実。

その身を守る為、大切な人を守る為、人々は離れていく……。

心が試されている。 見えない繋がりの強さが試されている。

そんな世界で私は生きている。 そういう世界で、娘を思い続けている……。

娘・美結は、私に大切などても大切なたくさんのお事を教えてくれた。

ジヨフィエルという芸術を司る天使がいると聞いた事がある。

美結がいつか描いたあの絵……あの絵が今に繋がる全ての始まりだった。

平和美術展に展示させて頂いた美結のあの絵に、何かを感じてくれた人との出逢い。

不思議な力を感じた。

美結——

私はこの名前が、この名前を持つ娘が……

本当に好きだ。

MYCB——

M……Me……美

Y……You……結

C……Connect……繋ぐ

B……Beautiful……美しく

MYCB Museum

いろんな人や命が美しく結ばれる

そんな世の中になつてほしい——

◆

新型コロナウイルスの影響が未だ残りつつある中、今度はロシアによるウクライナへの武力による侵攻が今年起きた。

戦争の悲惨さを世界中が知っている。

戦争の愚かさも世界中が知っている。

それでも起きてしまった現実。

ここに『おおでまり』というタイトルが付けられた一つの文集がある。

福島良子さんの御家族が、戦前から戦後に掛けて編まれた文集である。

御兄弟姉妹で編まれたその文集には、大切な家族の沢山の思い出が詰まっている。

ご家族一人一人の目線で、戦争の時代を乗り越えて来た時間が、幸せの時も辛い時も命がある事の大切さを語っている。

後世に繋ぐ思いで編まれたこの文集。その時代にしか体験出来ない思いを風に変えないように、伝え残す為に、今この令和の時代に人々とその縁を繋ぐ。

### 【私の八月十五日】

ここからは、【私の八月十五日】と題した文集の中の、筆者の御家族の方々の手記からその内容を一部整理して紹介します。

◇菊さんの八月十五日

手記 玉音放送――

昭和二十年その晴れた日の夏、重大放送があるとの知らせを受けて、自宅のラジオが壊れていた為、隣家にてその内容を聴きに向かった。

雑音交じりのラジオの音、息を飲む思いを表わすかのような鼓動。その時に聴こえて来た天皇陛下の『終戦』の言葉に全身の力が抜けて、しばらく時間が経った後に日本の敗戦をようやく飲み込んだ。

しかし、それは同時にこれからの人生や家族の事を思うと、不安のあまりまるで大木が急に倒れて押し潰されたような心情であった。

そうして、それでもなんとか生きていく中で、月日が流れ少しずつ平和を実感しながらも、中国残留孤児や戦争で親を失った子供達の事などを考える。

終戦の言葉を聴いたあの頃から何十年も経った今もまだ、戦争の傷が深く残っており、決して戦争は終わっていない！という強い気持ちが残っているという事も一つの事実なのである。

◇辰季さんの八月十五日

重大発表 玉音放送は陸軍省で聞いた――

昭和十二年二月・三島野戦重砲第二連隊に入隊。

昭和十六年十二月・真珠湾奇襲後の大東亜戦争勃発後にビルマ(現在のミャンマー)へと派遣。

昭和十九年十一月・ビルマより帰還し三島の原隊に復帰、長年暑い環境に身を置いていた為、冬の近い日本の秋は寒さが身に染みていた。

昭和二十年四月・臨時招集により東部八十八隊に入隊。

昭和二十年五月・陸軍省に配属。

昭和二十年八月・軍曹に任官。

この当時、陸軍省大臣官房通信隊に従事。陸軍省は元は市ヶ谷刑務所や陸軍士官学校だった場所にあった。任務は派遣軍と通信連絡を取ってその通信は全て暗号、受信した電報はただちに翻訳して、各部署へ配布するという内容だった。

そして、八月十四日。昼間には敵機から無条件降伏のビラがたくさん撒かれた。

そして、その日の夜には激しい空襲、靖国神社・宮城などにも被害があり、また熊谷も空襲中という報道も入りとても心配だった。

そんな中、「明日十五日。階段下石廊へ、十二時に集合せよ！」との命令が下る。

朝――

東京上空には日本の飛行機が飛んでいた。

正午に、階段下石廊にて待機していると、天皇陛下の玉音放送があり、終戦を確認した。

◇金雄さんの八月十五日

中支 江西省南昌 八月十七日に終戦を知る――

昭和二十五年五月。南支広東省惠州に駐留していた。この時、所属していた二十七師団は、米軍が上海方面から上陸するという情報により「急遽北上せよ！」と軍命令を受けた。

南支の五月は、既に真夏の気候だった。行軍すると汗はびっしょり、軍服に染みた汗の塩でゴワゴワになり、背中にはあせもに染みてヒリヒリした。夜になると幾らか涼しくなつてホッと一息を突く。

サトウキビ畑、タバコ畑、田んぼ、カエルが賑やかに鳴き、蛍が飛ぶ。

のどかな田園風景は、戦場にいる事をひと時、忘れさせてくれた。

一草一木いたわり進む

兵の心の 豊かさよ

見ろあの山も この川も

まるで故郷だ そっくりだ

さすが男児(おのこ)の胸を打つ

(在漢口、日本人中学校の先生が作詞作曲した「湖南進軍譜」で、兵隊たちはこの歌をよく唄っていた。)

昼間は敵機が来襲するので、部隊は夜行軍をした。夕方に翌日の朝食の為に米を炊いて飯ごうに詰めた。その後、宿営地を出発。月夜は良いが暗い夜は前の人を見失わない様に注意してついていかないとハグれてしまい、下手をすると敵に捕まり殺されてしまう。しかし、前の人を見失わない様に灯りを使えば敵に発見されてしまう。タバコの小さな火にも注意しなければならなかった。また、共に連れている荷物を運ぶ馬が、田んぼや池に落ちる事もあった為、夜行軍では一晩に20〜24km進めばよい方だった。居眠りしながら歩き、馬の尻にぶつかり目を覚ます事もあった。

次の宿営地に着くと敵機が来る前に急いで飯を炊く。朝の八時を過ぎると敵機が来襲するからだった。日中に炊事をして煙りを出せば部隊の所在が発見されるからである。また、昼間は昼間で防空壕掘りや対空監視などの勤務もありよくよく寝てもいられなかった。

やがて、広東省を北上し江西省に入って三南作戦で三つの街を占領した。しかし、八月に入ると敵軍の攻勢が非常に激しくなり、後方20kmに敵が迫って来ていた。

追って来ていた敵の支那軍は、奇しくも自分達と同じ二十七師団だった。

吉水という荒川よりも大きい川を軍靴や軍袴(ズボン)を脱ぐ余裕すらなく今日は右岸へ、明日は左岸へと渡って敵の追撃をかわしていった。

そんな中での八月七日だったろうか上官から、ロシアが日本へ宣戦布告をした、日本は世界中を相手に戦うのだ・・・と、言われたが兵隊は別に驚かなかった。新聞もラジオもなく、ポツダム宣言の事も広島に原爆が落とされた事も知らない。ましてや日本が負ける事など夢にも思わなかった。沖縄が米軍に占領された事も知らなかった。

そうして、支那軍の攻勢はますます激しくなっていた。

しかしそのうち空襲が無くなった事で、この後に大きな空襲があるのではないか？

と、不気味に思った。

やがて、全部隊が敵軍の追撃を逃れて、江西省高安という日本軍の占領地帯に入る事が出来た。昭和十四年の支那事変の際に占領した所で、屋根のある家は一軒もなく荒廃の街だった。しかし、それでも高安の緩衝地帯に入りホッと一息突いた。

そして、この日が八月十五日……日本国内では敗戦が告げられた日だった。

しかし、我々の部隊は翌十六日、青山万寿宮という大きな廟(日本の寺)のある場所へ宿営した。その時、各部の将校達が何かヒソヒソと話し合っていた。

翌十七日……「停戦協定が結ばれた」と知らされたが、そのうち停戦ではなく無条件降伏したという事がわかった。

将校も兵隊達も狂ったように泣き叫び激昂し、その極みに達していた。鉄帽を地面に叩きつけてオイオイと泣く者、銃剣を振り回す者、握りこぶしを奮って怒り叫び走り回る者、等々。

「どうして降伏したのだ。在支軍百万は健在だ。派遣軍だけでも戦うぞ！」

「これから捕虜にされて、軍公路工事の苦力(人夫)をさせられるのだ！」

憶測とデマが飛び交い、收拾のつかない混乱に陥った。

そうしてそんな中、軍の重要書類を焼き払い、各連隊の軍旗も焼いた。

翌日、南昌の街に入った。在留邦人達が我々を出迎えてくれた。ポロポロの軍服、支那の布靴を履いた者、眼ばかりをギョロギョロさせた乞食の様な兵隊たち……

在留邦人を見て初めて兵隊ではない日本人の顔を見たのだ。

「すまない。申し訳ない。兵隊さんに、こんな苦勞をさせて、日本は負けてしまった。ご苦勞さまでした。」

そう言いながら、在留邦人達は涙ながらに私達を出迎えてくれた。

前線地区に近い在留邦人ほど真から尽くしてくれた。私達は南昌在留邦人の暖かい歓迎を受けて心が落ち着いた。心尽くしの握り飯、湯茶の接待も受けた。

その南昌で三日ほど休養し、二十七師団は九江へ出て揚子江を船で南京へ向かう事



となった。日中は暑いので夕方からの行軍となった。その途中に大きな湖があり、その傍に廬山というゴツゴツした高い岩山がある。ここは浪曲で有名な「廬山の名月」

折しも九月半ば、皎々(こうこう)として十三夜の月が廬山を照らしている。

月の光りに濡れて敗れた兵馬の列が黙々と影を落として続く。

六年前の武漢戦に日本軍が戦勝したこの地を、今は戦に敗れて、虚無と失意の部隊がその湖畔を行く。無心に照り渡る月の光。

敗れたる兵馬の列に夏の月

◇トシさんの八月十五日

八月十五日・終戦の日・あまりにも思いは、悲しい暑い夏の日の事でした――

その日は、お昼に大事な放送があるということでラジオのスイッチを入れて家中がお膳に向っていた。ただ、父だけは松根油製造の仕事に出て不在だった。

コメ姉さんは繁兄さんの戦死の知らせを受け、当時四歳の健一君と新潟の実家から来ていた。

そうして、やがて「玉音放送」が始まった。しかし、雑音が酷くて聴き取れず結局は母が隣組の新井家(現・国指定重要文化財)に確かめに行った。

「戦争に負けた」という事だった。

私は傍にいたコメ姉さんと健一君が愛おしくて、かわいそうで涙がこみ上げてきた。

五日前に繁兄さんの英霊は、コメ姉さんの胸に抱かれて帰国したばかりだったのに……！

繁兄さんは健一君が生まれて来る前に出征したので、我が子を見る事も抱く事も叶わず、硫黄島で戦死した。

健二君は、お父さんに会う事も甘える事も叶わなかった。

コメ姉さんは、新潟の実家でひたすら夫・繁兄さんの武運長久を祈り、一家の一方ならぬ愛情を受けて健二君と一緒に銃後を守って、夫の無事の帰還を待っていたのに、夫を戦争で失ってしまった。

父も母も私たちも、繁兄さんの戦死は悲しい。

「戦争はみじめです。二度といやです。」

コメ姉さん、身体を大切にして、繁兄さんの分まで長生きをして下さい。

◇良子さんの八月十五日

私の終戦の日――

私はあの頃、熊谷の理研工業に勤めていた。

国民一億・火の玉となり戦争に全力を挙げていたが、八月頃には敗戦の色も濃くなり、人々も焦りと疲労と不安の日々が続いた。

八月十一日は、硫黄島で玉砕戦死した繁兄さんの遺骨を熊谷の熊谷寺(ゆうこくじ)に、コメ姉さん、遺児となった幼い健二君、父母、家族でお迎えに行った。

白木の箱となって、姉さんの胸に抱かれる兄、そして電車が揺れる度に白木の箱の中で「ガタリ、ゴトリ」とする兄さん。(小さな位牌)

十三日は、迎え盆だったが、野上地方は旧盆だったと思う。

十四日の夜、熊谷地方は大空襲に襲われ、実家から見ると東の空一面、真っ赤になり、また暗くなり、飛行機の爆音、そして爆弾の炸裂する音を耳にして、私たちは身を寄せ合って恐怖の長い長い一夜が明けた。

そして、そんな中で十五日を迎えた。

朝から太陽がジリジリと照りつけていた。そんな暑い中、私たちの地方はいつもと変わらず、昨夜のあの恐ろしさは嘘のようだった。

天皇陛下の玉音放送があるという知らせは、役場からあったのか、隣組長からあったのか、よく覚えていない。

お昼近くになると、家族全員がお膳の前にきちんと正座して待った。

母は胸をピンと張り、襦袢の襟元を指先で合わせて居ずまいを正し、天皇陛下の御言葉を静かに待っていた。

ラジオにスイッチを入れると「ジジー、ビビー、ガリガリー」と雑音の中でお昼の時報が鳴った

天皇陛下のお声は、低く悲しそうで、いくら耳を澄ませても私には聞き取る事が出来なかった。

・・・が、その直後に戦は敗れた事を知り、長かった戦も「敗戦」という形で終わった事は事実だった。

戦は終わっても人々は、衣・食・住に苦しみ、海外からは、兵士、移民団、大勢の人々が、内地へと帰還した。

時は流れ、現在は高度成長を向かえ、人々の生活は豊かになった。

あの戦争で大切なモノも数々失った事だろう。

そうしてやがて、老年期を迎える事となったが、これからも健康に注意して、生命ある限り悔いのない日々を送りたいと願う。

(今日で四日間も雨が降り続いています。)

昭和六十三年六月二十七日 記

◇昌信さんの八月十五日

私は当時、秩父郵便局に勤務していた。しかし、終戦日となった八月十五日は寄居郵便局の詰め所に出張で出掛ける事になっていた。

朝、野上駅から電車に乗り、寄居駅で降りて倉吉さんと一緒にホームの高架橋通路を渡っている時に、駅の拡声器からラジオの音が大きく聴こえて来た。

「今日正午に、重大放送がありますので、国民はこぞつて聴く様に」

と、七時のニュースが駅構内に放送された。

そして、寄居郵便局の裏にある電話工夫の詰め所に行ったところ、熊谷局から電話があり、昨日空襲で熊谷がやられたという事もあり、すぐに熊谷に来るように伝えられ、倉吉さんたちと寄居駅に戻った。

しかし、寄居駅に来たものの熊谷方面の電車は出ないとの事で、再び詰め所に戻る事になった。ところが倉吉さんが寄居の街で熊谷の方に行くトラックを見付けて来てくれて、結局途中までではあったが、倉吉さんと私と越塚さんという方と三人がトラックに乗り、ようやく出発した。

その道すがら、旧秩父街道の大麻生小学校の近くまで来た時、熊谷方面の空が真っ黒く染まっただけでお天道様だけがギラギラと光っていた。

と、その時、熊谷の方向からリヤカーを引いてくる女性が来た。しかしよく見るとその足元は白足袋を履いているだけで、靴を履いていなかった。

きつと空襲で焼け出されて、命からがらここまで逃げて来たのだろうと察しがついたが、知人が身寄りを頼って引越して来たのかも知れない……。

その後、熊谷で暑い一日を過ごしたとある晩には、バカに赤いような不気味な月を

目にした。

また、上熊谷の駅に向かう時に近くの星川の掘りを「ここで何人か死んでいるのだ」と、言っていて探しているそんな人もいた。

その後、私は二ヶ月くらい熊谷の方に空襲の後片付けに行く事になった。

九月十日頃になって、初めて進駐軍が熊谷電話局の方に来た。十七号のところへ小さいリヤカーみたいな自動車(ジープ)に全部で十五台くらいで来ていた。こんなに自動車があれば、必ず具合が悪くなるものだと思っていたが、そんなこともなく、これはすごいモノだと思った。

進駐軍が電話局に来て間もない頃、局のゴミ捨て場に行ったところ、十五センチ四方の箱が捨ててあったのを見付けて開けてみたところ、セロハンの中にビスケットのような菓子がいっぱい入っていたので思わず拾って帰った。

どうしてこんなものを捨ててしまうのか?と思い、父に訊いてみたら「そんな者を食えば直ぐ死んでしまう」と言われた。

しかし、諦めきれなかったか、私はそのビスケットを一枚取り出して小屋のヤギにくれてみた。そして、翌朝そのヤギのところに行ってみると、いつもと変わらず何ともない顔をしていたので、結局みんな分けて食べた。そのビスケットの美味しかった事、それから、角砂糖が入っていた。そんな珍しいモノを見た事なかったのでこれはすごいものだと思つた。今で言う賞味期限切れというモノなのだろうが、こういったまだ全然食べられるものを捨てるなんて、向こうは食料を豊富に持っていたのだと思つた。

戦争をすると、食糧難を始め、衣料や物資も無くなり貧しいどん底の生活に陥ったり、栄養失調で命を落とした人も沢山いた。

戦争で、掛けがえのない我が子や父や母や兄弟を失つた不幸な人達が、沢山出来てしまった。空襲で家を焼かれ、家族を失つた浮浪児など悲惨な状況を招いてしまった。

私が体験した事柄は一生忘れ去る事は無いと思う。

戦争は不幸を招くだけなので、二度と繰り返す事の無いよう、念願して止まない。

◇宗淑さんの八月十五日

昭和二十年八月十五日。

終戦の日のその記憶をここに思い起こしてみようと思う。

小学校六年生、当時十二歳だった夏休みの事だった。

父は、松根油搾りの奉仕作業で、樋口の馬頭たんぼ付近の作業場へ出掛けていて留守にしていた。

この日の朝のニュースで、正午に重大な放送があるので国民はこぞつて聴く様にと放送があった。なので、ラジオを聴き逃さないように、よく聴こえるように調整しておいてから、お膳に向かい昼飯を食べ始めた。

そうして、やがて正午になり、おっかさんは座敷の板の間に素足できちんと座り、着物の襟を直し、玉音放送を待っていた。

私も食事を途中でやめて、家族みんなで頭を垂れてラジオを聴いていた。

しかし、今日に限って雑音が酷くさっぱり聴き取れなかった。後に聞いた事だが、本当かどうか本土決戦を主張する一部の軍人が姑息にも妨害電波を流していたという話もあった。

初めて聴く玉音放送は何を言われていたのかよくは解からなかったが、厳かで何だか悲しい感じがした。

おっかさんは「みんなで力を合わせて戦争に勝つまで耐え忍び頑張るように」という事ではないかと言っていた。

その後、私は途中の食事を平らげてから近くの荒川の「イツケ」の川原に水浴びに行った。

これは、後に良子姉さんから聞いた話したが、おっかさんは放送がよく聴き取れず何となくおかしな気がしたので前の新井家へ確かめに行ったところ、そこで勇三郎さん

とおるいさんから「日本は、戦争に負けた」と聞いたの事だった。

そんなことも露知らず、私は川へ水浴びに来ていたが、いつもと違って泳ぎに来ている子供達の数が少ない様にも感じていた。しかし、大して気にも留めずに、槌ちゃんと治男さんが来ていたので一緒に泳いでいた。

やがて、ずいぶんと水の中にいた為か、唇が紫色になるまで身体が冷えて来たので、白鳥小学校の下の岸にある岩の上に腹ばいになり、槌ちゃんと治男さんと三人で体を温めていた。

するとその時、ミチエのしげるさんが川原に来て、川を隔てて大きな声で私達に、

「おーい日本は戦争に負けたつうどー、水浴びなんかよして、早く家けえりなー、男はなー、みんなキンタマ抜かれて、女はなー、みんなつれていかれて、やられてしまうつうどー」と言っただけだったので、私達はびっくりして声も出なかった。あの時流した涙と、川の流れる音と一緒に聞こえて来たしげるさんの言葉は今でも心に残って忘れる事は出来ない。

「困った事になったなー」と、これからどうなるか心配でたまらず、私達は小さな胸を痛めていた。そうして三人共着物を急いで身に付けてそれぞれの家路についた。

しかし、おつかさんの言葉というのは本当に不思議なもので・・・

「やまの方へでも逃げるようかねー」と私が言ったら、

「まあー、そんなことは、なかんべー」と言ってくれて、安心した気持ちになったのをよく覚えている。

◆  
【繋がる奇跡】

MYCBミュージアムの主催者であり、美結さんのお父様である中村寿さんが経験したミュージアムが生まれるまでのさまざまな繋がりのお話をここに御紹介します。

◆祖母の涙

十年くらい前 祖母から宝物と言われた中身の見えない茶色の段ボール箱を預かり物置の奥へ仕舞った

その後 何気ない日々が過ぎて行く…

それから数年後に訪れた突然の悲劇

美結が空へ旅立ってしまった

美結の亡骸を見て祖母が何かを思い出す様に泣いていた…

◆綴るといふこと

悲しみのどん底の中 手記を書こうと思った

一行書くと悲し過ぎるあまり涙が止まらない

書いては泣いて 書いては泣いて を繰り返す

それから数年 僕は抜け殻状態の足跡を残すかのように

色んな節目に 目に焼きついた景色を描写する様に綴るようになっていた



◇宝物

やがて数年後

祖母も空へ旅立った

僕は宝物と言われて預かってた あの茶色の段ボールの事を思い出し

埃の被った段ボール箱を開けてみた

まさかの家族文集

家族が宝物だったのかと・・・

◇繋がる縁

それから一年も経たないうちに

新型コロナウイルスという未知の感染症が流行り出す

マスクが不足しているとテレビのニュースで知り

僕は

「美結の友達が感染したら命に関わる事になるかも知れないそれだけはダメだ」

そう思い込み行動に出た

未使用のマスクを募り 福祉施設や豪雨被災地へ寄付をする活動

その結果新聞社の取材を受けることになった

数日後ふと

ガリ版刷りの祖母の宝物である家族文集「おおでまり」を手にとって

ゆつくりと読んでみた

すると家族文集「おおでまり」が過去に取材を受けている事を知る

それは まさかの

マスクの寄付活動を取材してくれた同じ新聞社

不思議な事に色々と繋がっていた

祖母の兄の誕生日が美結の命日と一緒に

祖母の二番目の兄と僕の次男の誕生日が一緒

偶然なのか 必然なのか

取材を受けた新聞社が同じだった縁もあり

三十三年の時を経て その当時の記者に

今度は僕が取材を受けた

あの時の祖母の涙

祖母には病気で身体の弱い兄が居て 病死している事

美結が亡くなった時に

何かを思い出して泣いている様に映ったのは

病死で亡くなった兄の事だったのかも知れない……

生前不自由な身体だった美結だけど

もう自由に動き 好きなものを食べ

祖母や祖母兄弟姉妹や祖母の親とも会っているんだろうな……

美結が祖母たち家族の歴史も繋ごうとしている

僕はそう感じたのだ

◇MYCBmuseum

僕が子供の頃から馴染みの秋山祭り

だいぶ前に施設の先生から 施設に居る子の中には

「検診を受ける為に施設から病院までの白い介護用バスの道中

窓から色んな景色を見るのが唯一の楽しみな子もいるんですよー」

この一言で僕は衝撃を受けた

生まれた場所や環境で意味もなく制限されてるなんて…

美結の友達として

そして僕は美結のパパとして

思い出を作つてあげようと考えた

何気なしに行つた美術展から

今は自分で

MYCBmuseumというものを開催している

なぜMYCBギャラリーでないかというところ

Museum カタカナにすると…

ミュージアム

ミュ…と、入ってるからです

不思議なくらい今も繋がっている…

この小説のタイトルになっているこの言葉は、今から約六年半前に幼くして天に昇った中村美結さんの小説を書こうと思った時に、彼女の名前からとった言葉でした。

お父様の中村寿さんから、美結さんの絵がきっかけとなって出来たMYCBミュージアムの小説を書いて下さいとお話を頂いたのは、今年の一月に開催されたMYCBミュージアムの展示会。私の詩と写真を展示して頂けるというお話を頂いた縁で展示会に足を運ばせてもらった事がこの小説のお話を頂いたきっかけでした。

しかし、正直私は一瞬悩みました。

美結さんの脳性麻痺という障害、そしてその現実立ち向かい共に家族として生きて来た中村さんの御家族に、どんな物語を綴ればいいのか、どんな物語で美結さんの命と存在に向き合えばいいのか、すぐには考えられなかったからです。

そして、その展示会の帰りの車中で、それでもなんとか色々頭をこねくり回しながらアイデアを練っていました。ですが今思えば、それは自分がそこから逃げたくないという意地が多分に入っていたのかも知れません。

そんな中で、先ず執筆の前に必要なのは取材です。その取材でやはり重要な役割を果たしたのはMYCBミュージアムのホームページでした。中村さんの手記やお祖母様から受け継いだ戦時中の事が綴られた御家族の文集。また中村さんの活動報告にも目を通して頂きながら力を貰い、やがて基本的な骨組みとなるプロットを作りながら、電話やラインで何度も中村さんにお話を伺う事もありました。

そして、そうした中でふと感じたのは、自分にしか書けない物語を美結さんが書かせてくれているんだという感謝の思いでした。

MYCBのコンセプトの中にある人を繋ぐという事。みんなで繋がって、寄り添い輪になって笑顔になれば・・・そう、この物語を描いている時、私は会った事の無い美結さんの笑顔をいつのまにか思い浮かべて一文字一文字を綴っていました。

物語の中で、美結さんは天使です。しかし現実の世界でも美結さんに触れた方々の心と記憶の中に天使として存在してるのではないのでしょうか……

中村さんの御家族はこれからも美結さんとの思い出を胸に進んでいきます。

そして、そんな御家族を美結さんは空から見守っています。

その人を繋げる魔法を使って、たくさんの笑顔を広げて、彼女もきつと笑顔でいる事  
でしょう……

ありがとう

美結さん——

あなたの物語が今ここに出来ました——

心からの敬意と感謝を込めて——

銀月